



13
3241



門へ 13
3241
蔵

本重

貞徳

井家

子父の
双言
公羊傳に
るるさる
流く

辱し免誠ふを糸たなり大和の
國飛人歌討とていふはなほた
ふれと原相言つてをいして
試勸免西心を徹しつての御
あ

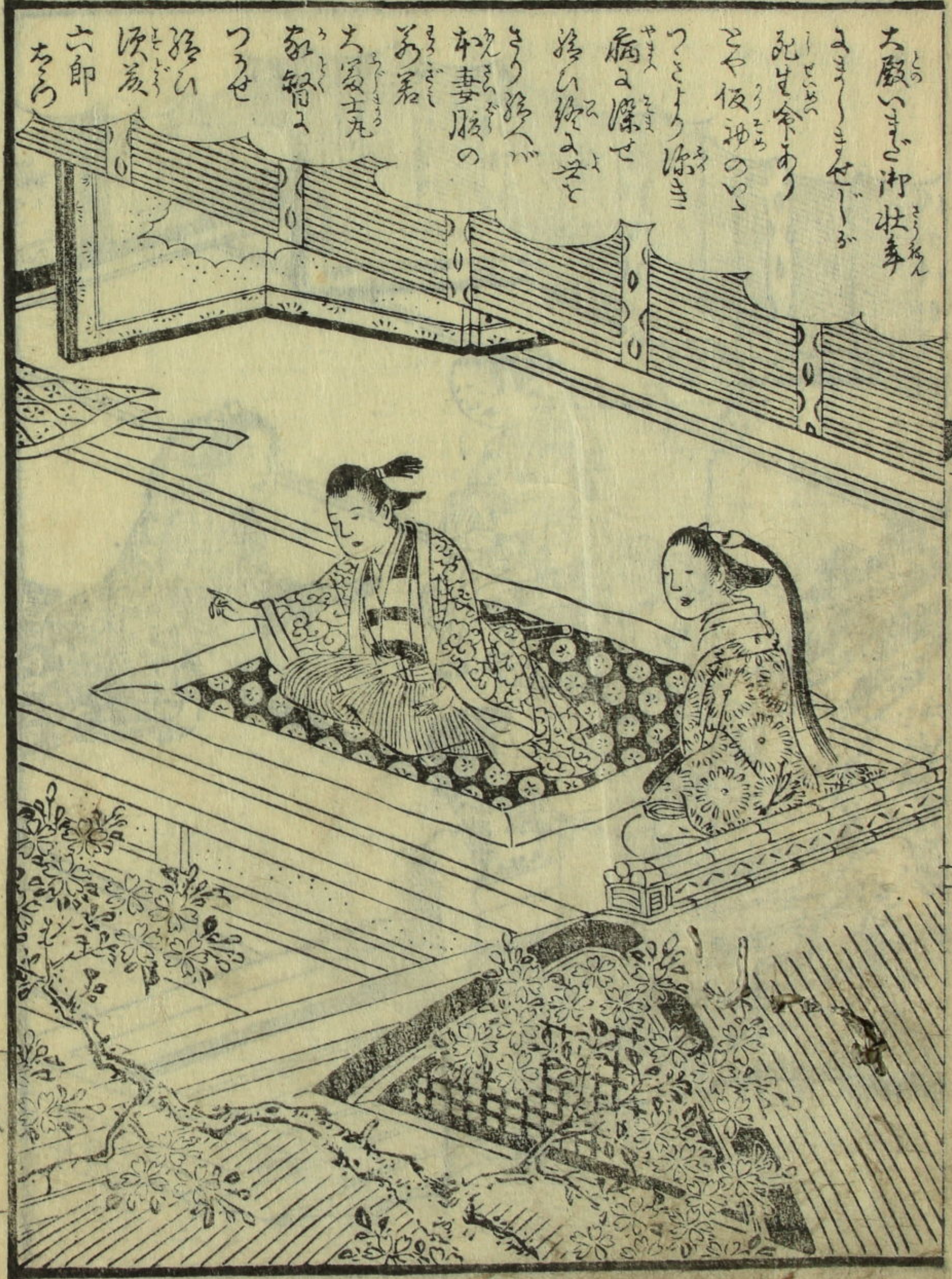
昭和十年七月九日
野末



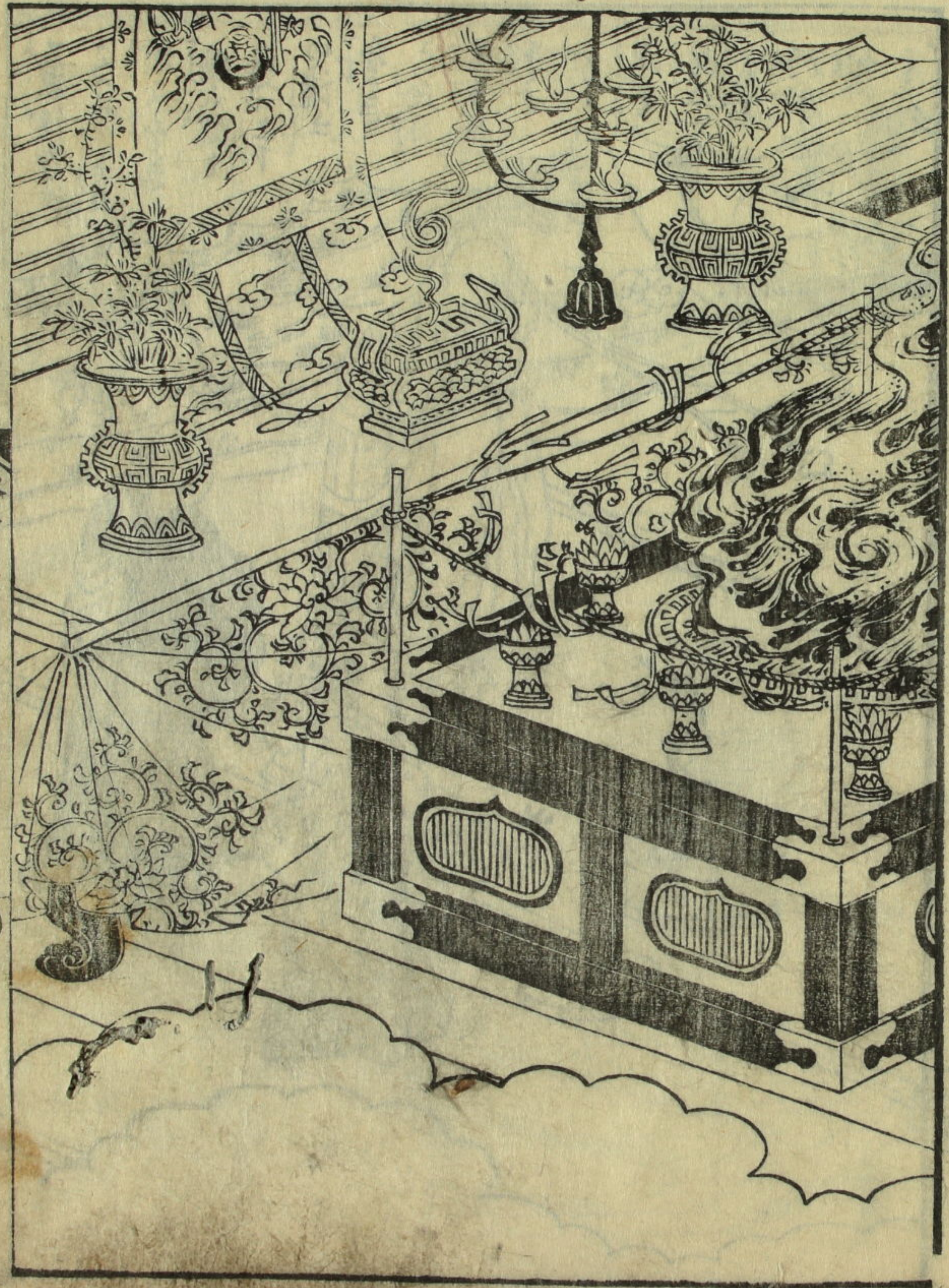
こそはや〜ぬる其かたこゝ成し高きぬ
 の強りきり〜と綴りに〜を路の題て
 まう〜た強城強りの〜見れんそのに
 侍ちり〜と孝成勸えん孝成〜しむ
 ふのさめ〜らにた〜んま〜和蘭の百夏
 六月の比浪義乃漢多羽誌は



かくの
 宿之夕
 を見る
 女を
 不幸
 みる者
 阿比松
 松及大殿
 河原石
 しくしつ家
 夢りしよお懐いて
 法まうれやせし
 さそく果報
 つる花若うふ
 佐々丸が富く女
 赤面して退き



大殿いまお河原石
 死生命あり
 さらば油のい
 つとより清き
 病は深せ
 病い癒えそと
 きり路入
 本妻腹の
 女若
 大坂土丸
 家智
 つるせ
 病い
 涙
 六郎
 ちの



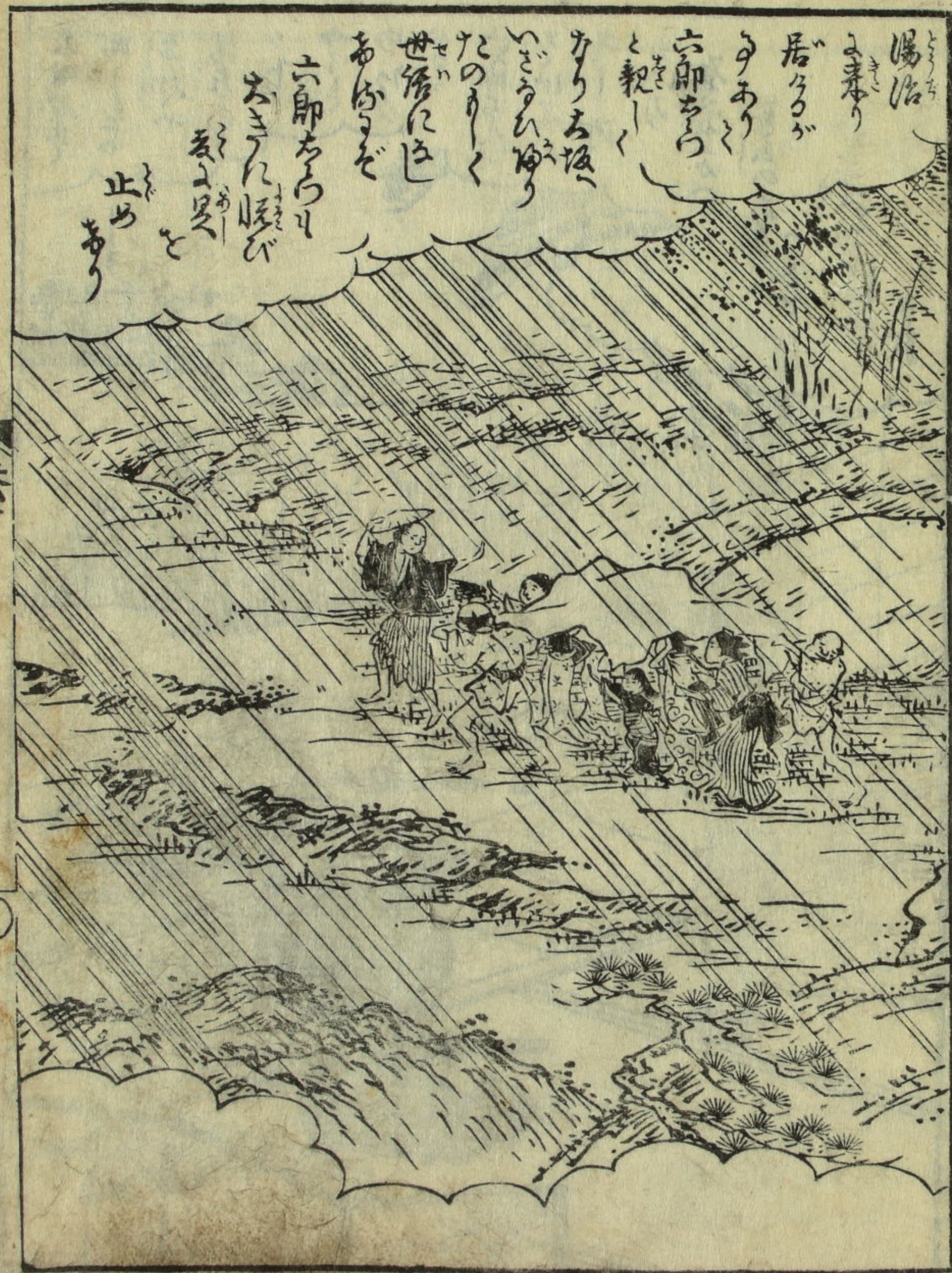
おまの方へ大蔵士どの
 お智つうせほひ
 めろと云く娘と
 薩麻寺山体と
 中のみ
 大蔵士及と
 泪休
 多るぞ
 身の
 毛も
 うらて
 怒る



結うけ
 河とせ
 うけび
 切教
 母と女
 がうと
 引きつ
 方とま
 の
 ちり
 ちり



是れ其六のりん士
 おまの方と密色
 大に六とのりんと
 表及治まを教
 の味に語りんとま
 ども教で合持せ
 るん
 先ん切後せ
 留まぬりま
 治まふ大に士
 及へりくや
 上りりま
 六郎ちのへたき
 有たれん思意
 治まぬ六郎ちの
 治まぬか
 下城を



湯治
 居々が
 夕あり
 六郎ちの
 と親しく
 かりと返
 いさるいゆ
 たのりく
 世にほ
 あゆまぞ
 六郎ちのり
 おきんは
 新
 止
 あり



須屋六郎ちの
 方いなるが
 なる湯治
 にかつけ
 密な家の
 屋下を
 りとら
 多室
 大板の
 家の
 のよ
 のや
 湯治の
 との若
 ほどく



神楽活
 ちまひま
 活即
 ちの
 娘活二
 人の
 歌活及
 六の
 と対
 本園
 と美如
 大板活
 修活内
 虚五倍
 五倍と倍
 又ひ
 びりり



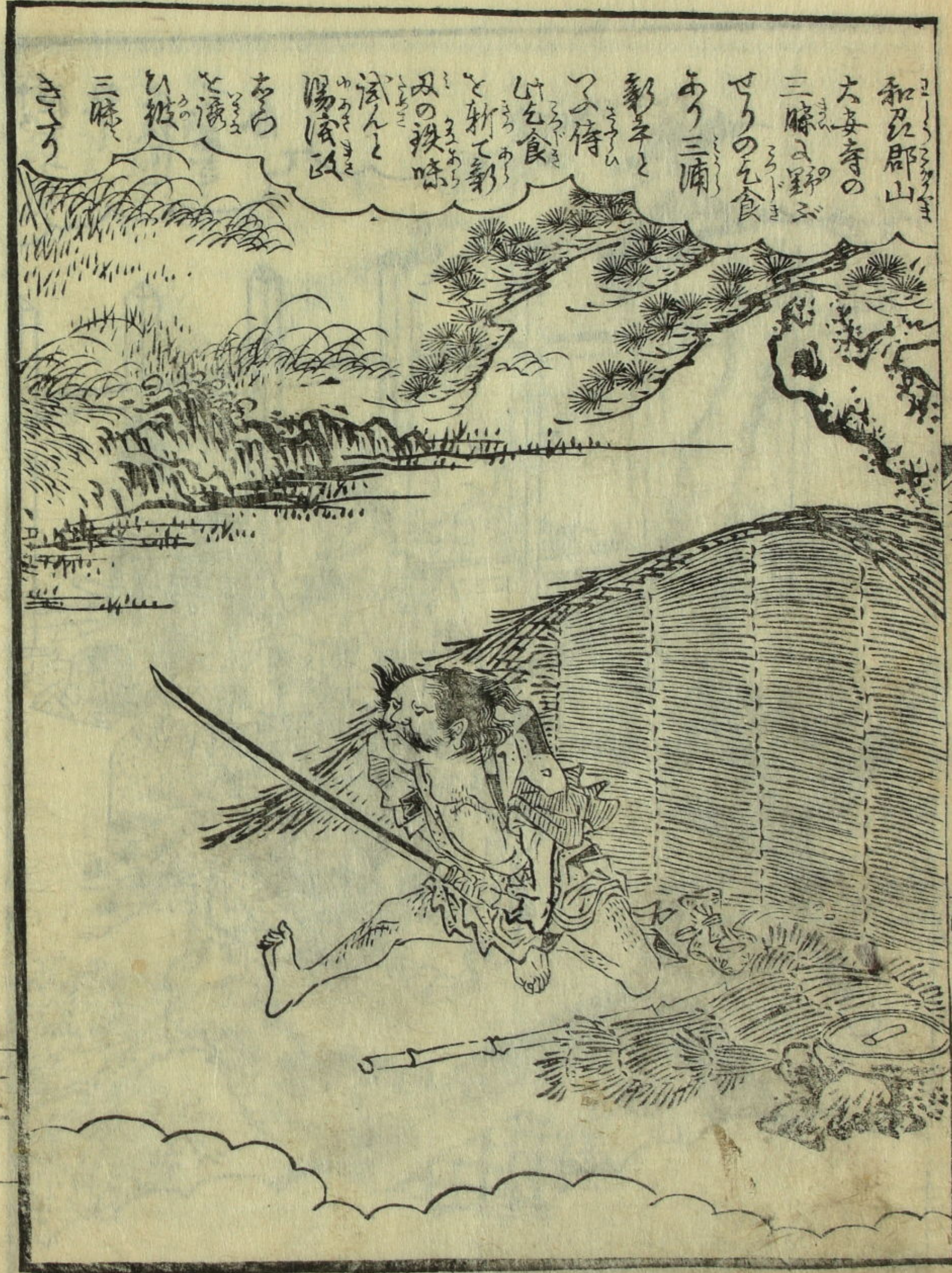
大板活
 所と石
 本野や
 活左の
 カト
 中と
 の行
 多
 六郎ちの
 をけ石
 一河
 出の
 活左か
 きのあり
 つと
 まひ
 多

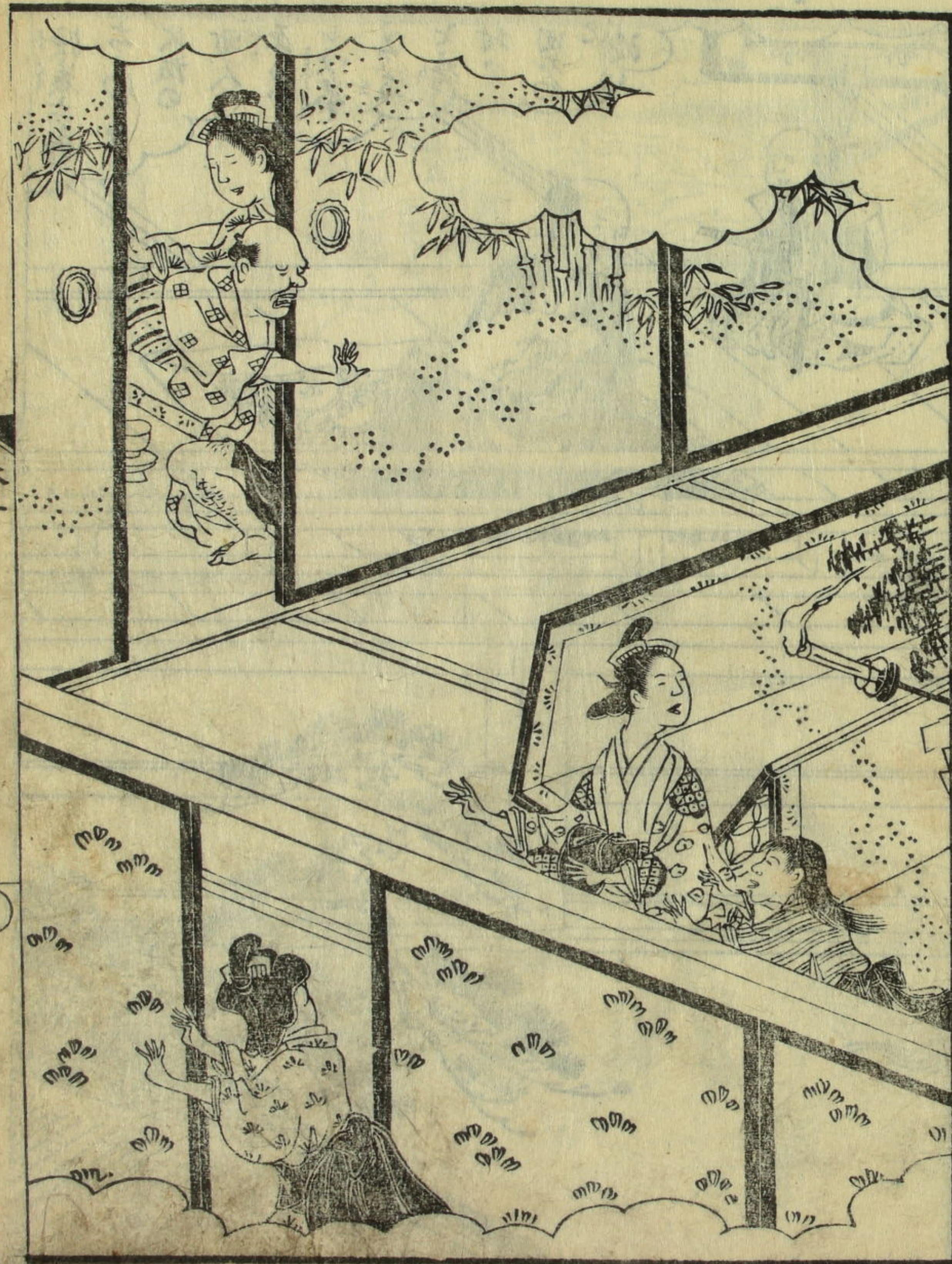


社とう
出板
て急ぎ
ふ



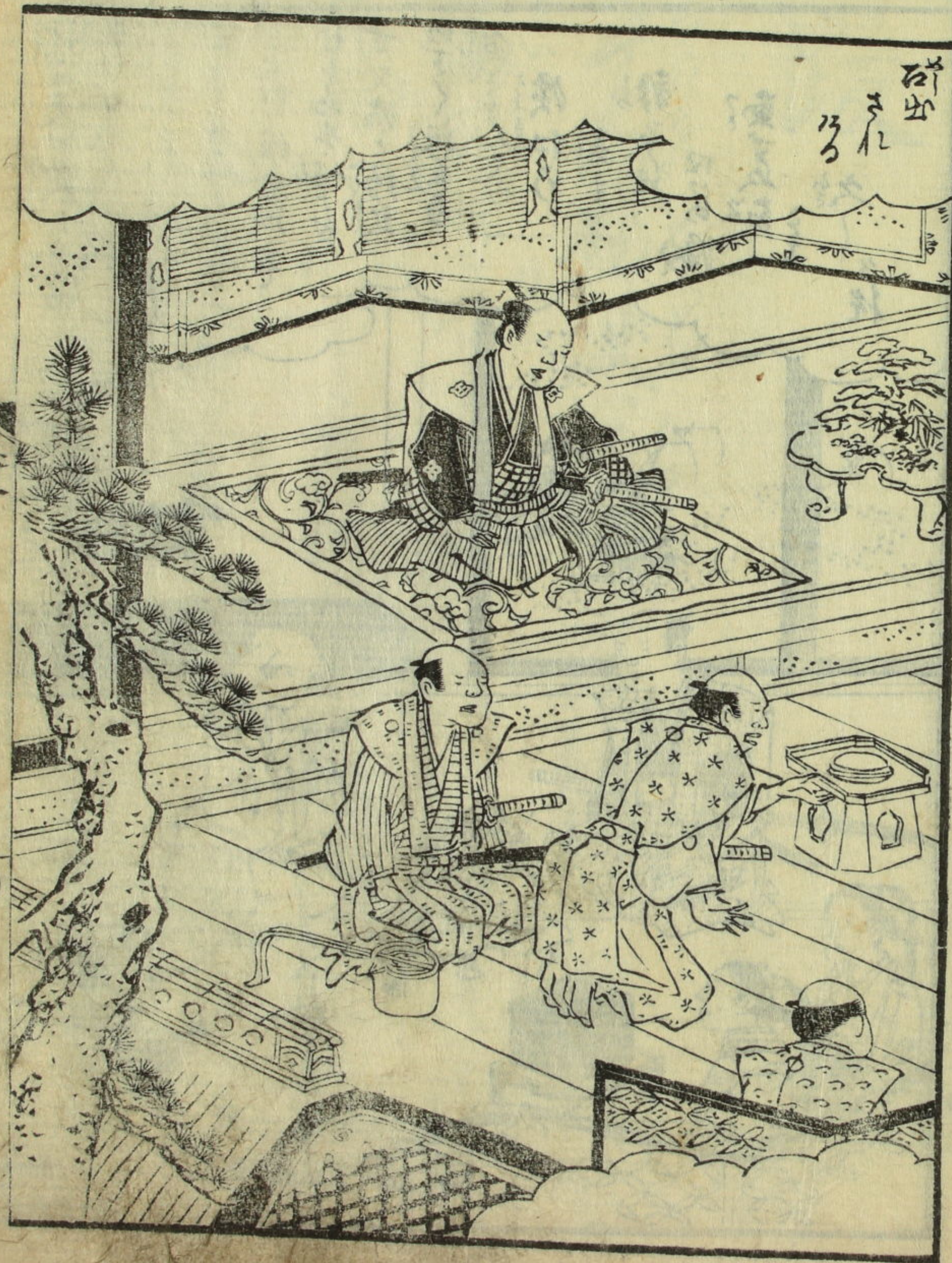
去る後部大の教の
あふぬ易のまひ
我兄弟の社う
通候一う候のま
又後部家の靈
これ出候が
通候の
うあま
おまれう
おく大候
立候の中
とてま
まうり後部
たの難
さうき
かくみまひ



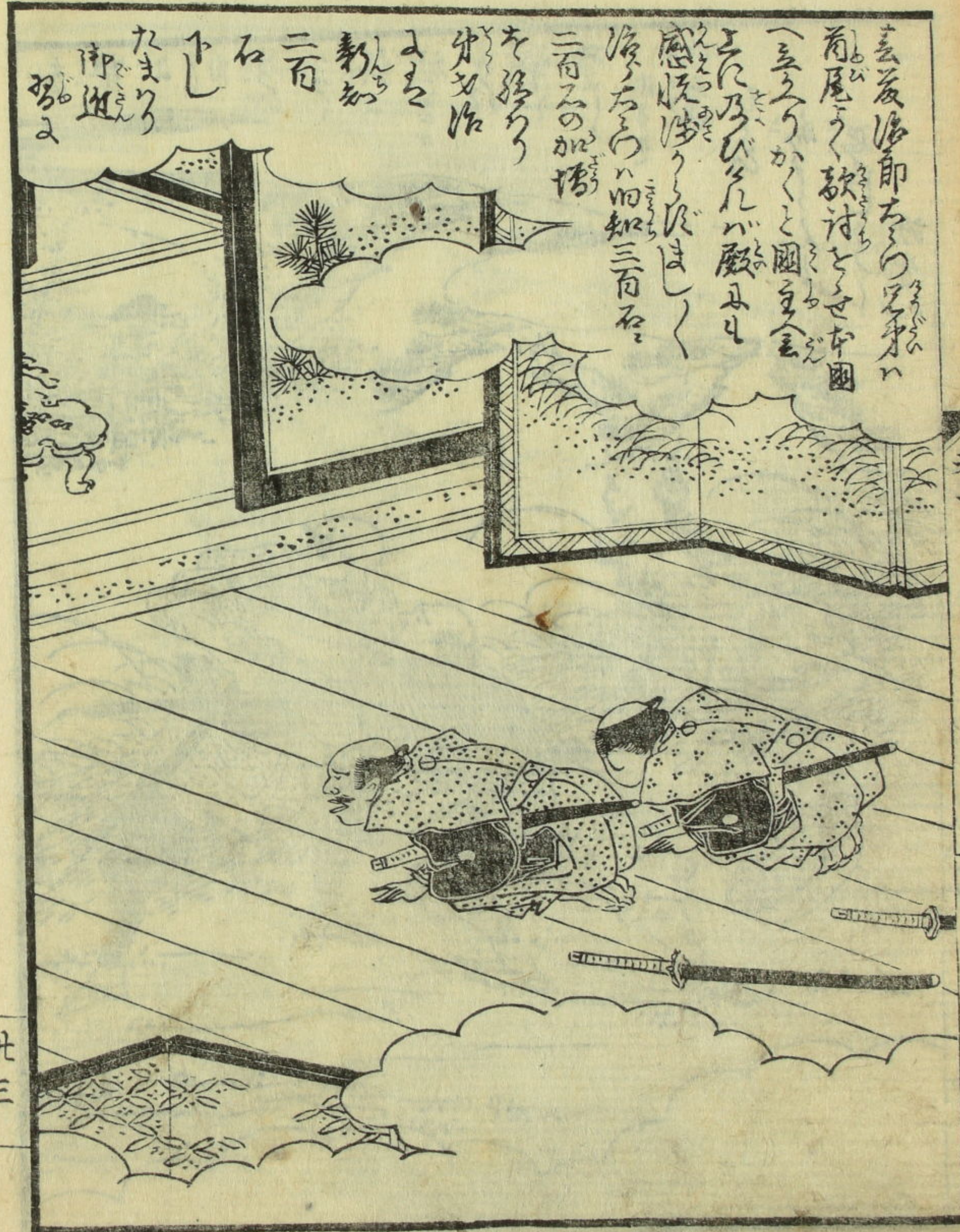


八云が後の
 おひりうけさ
 金まを得る
 本辻の松玉
 来りた女と
 あら裁縫が
 洗研のちま
 里は倫と仕
 物 彼を
 食とこほ
 うらまては
 よひのしり
 多るなり忽ち
 悪くそ為取
 破しつゝ
 罪又妨られ
 つか
 しが





研出
さ
る



去後海即ちその足跡の
前尾うく款討とせや中
一三よりかくと國を
また及び先ハ殿且
感懐清うはましく
後ちその知三百石
二百石の加増
を強り
舟カ作
また
新
二百
石
下し
たまり
御進
り

跋

予に於て一々々々
 予の勅使河原内伝行といふ室
 永の晩年トヤ。享保村ありま。中居奉
 乃地。乃。舌耕。祖父のゆけ人
 の。軍。学。の。ま。が。自。然。と。世。後。乃
 俾。り。て。方。板。了。年。久。く。信。居。一。人。



天を裁きつるの
 徳といふは深く
 衆を安んずるは
 仁といふは深く
 と云板(板)者(者)を
 むとらるるを
 静(静)多(多)は
 静(静)多(多)は
 静(静)多(多)は
 静(静)多(多)は

夕

中へ彼をいへるなりぬ衆部付時春玉城也
 の清名をいへるなりぬ衆部付時春玉城也
 と振る男の白地へ安上りて取らせし。おそに
 怪し記さす。其衆もいへるなりぬ衆部付乃一結也
 是なり。いへるなりぬ衆部付乃一結也。

攝陽浪速旅客

多田一芳

二二

